

自分の感受性を守る

柳井市立柳井西中学校3年 松田 耀平

人権を著しく侵害するものの一つにいじめがあります。これは、テレビなどの報道で聞くように僕たち中学生にとって身近な問題なので、真剣に考える必要があると思います。そのため、いじめを減らすにはどうすれば良いか考えてみました。

僕が小学生だった頃、同級生にいじめられている人がいました。暴力はありませんでしたが、その人を罵倒するような言葉が多く聞かれました。しかし、本人も言い返していたし、大丈夫だろうと僕は判断してしまい、何もできませんでした。今考えてみると、その人はかなり傷ついていたはずですが、いじめていた人たちがやめることも、誰かが止めることもなかったのはいじめは終わりませんでした。僕は、いじめが続いた原因は、相手の気持ちを考える力が足らなかったからだと思っていました。相手が嫌がるということをもっと理解していれば、いじめを止めることができたのではないかと考えたのです。

しかし、僕はある詩と出会い、別の考えに至りました。その考えは、相手の気持ちを理解する以前に、自分の気持ちを理解していなかったというものです。それに至ったのは今夏、合唱コンクールに出場した時のことです。他の学校が歌った曲の中に、「自分の感受性くらい」というものがありました。僕はこの曲に衝撃を受けました。歌詞の一つ一つが心に刺さってきたのです。

ばさばさに乾いてゆく心を
ひとのせいにはするな
みずから水やりを怠っておいて
気難しくなってきたのを
友人のせいにはするな
しなやかさを失ったのはどちらなのか

僕はこの詩を、「自分のすることは自分で責任を取らなければならないから、日々のストレスや不満をためこんでしなやかな思考力や判断力を失ってはならない」と解釈しました。いじめをしていた人たちは、このしなやかさを失っていたのではないかと思います。そのせいで、日々のストレスや不満といじめられていた人への不満を混同してしまったのでしょう。それと同時に、自分が発言したことに対しては自分が責任を取らなければならないという意識も低かったのだと思います。同様に、止めることができなかつたのも、判断力や責任感が弱かつたからだだと思います。

また、この詩の中にはこのような言葉もありました。

初心消えかかるのを
暮らしのせいにはするな
そもそもがひよわな志にすぎなかつた

初めはいじめを否定していても、それがだんだんエスカレートしていき、日常になってしまえば、大丈夫だろうと知らない間に肯定してしまっている自分がいました。しかし、当時は肯定してしまっていることにすら気づきませんでした。初めに抱いたいじめへの否定的な考えをもっと大切にしていれば、日常の中で簡単に薄まってしまうことは無かつたのかもしれない。

この詩は、次の言葉で終わっています。

自分の感受性くらい
自分で守れ
ばかものよ

それまでに詩の中で書かれていた、受け入れたくない自分へと変わってってしまうことの原因は、感受性にあるということだと思います。いじめが続いてしまったのは、自分の中にあつたストレスや不満、自分の言動への責任感、いじめへの否定的な考えを誰も明確に理解することができなかつたことで正しい判断ができなくなり、次第に感受性がいじめを日常ととらえ、抵抗感が薄れてしまったからだだと思います。つまり、いじめが続いた原因は感受性の変化にあり、自分の気持ちを理解していなかつたということが根幹にあるという結論にたどり着きました。

僕は、自分の気持ちを理解するためには自分の気持ちを文字や言葉にすることが大切だと思います。数学で複雑な問題

を解く際に、図などを用いて考えを整理することがありますが、それと同じように自分の気持ちを文字や言葉にすることで、複雑にからみ合っていた考えを別々に分解することができます。また、自分の気持ちを文字や言葉にすることは意見を発することにもなります。互いに意見を発し、交換することで、考え方の違いを知ると同時に、その違いから自分の考えをより明確に知ることができます。このように、自分の気持ちを文字や言葉にすることによって、自分の気持ちを論理的かつ明確に理解することができます。

正しい判断力や感受性が無ければ、相手の気持ちを理解して正しく行動することはできません。だから、日頃から、相手の気持ちを考える以前に自分の気持ちを考え、正しく理解して感受性を守ることが、いじめを減らし、そして人権を守るためには必要だと思えます。